（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　高橋　原

高橋原氏論文「ユングの宗教論 - 分析心理学の神学的傾向について - 」は、分析心理学の創始者Ｃ．Ｇユングの思想とキリスト教思想との関連を追求したものであり、この観点から、ユング思想をその歴史的生成の文脈に即して性格に再構築しようとした極めて堅実な研究である。このような問題意識を述べた「はじめに」およびそれを敷衍した第一章に続いて、第２章では、ユングと宗教またはキリスト教との関係についての先行研究を検討し、なお問題の解明は不十分であるとの結論を述べている。

続く第３章は主としてユングの自伝から、牧師であった父親との関係に始まるキリスト教との関わりを廻る。とくにユングのキリスト教理解の原点というべき有名ないくつかのイメージ（「大聖堂ヴィジョン」（大聖堂から糞尿があふれ出るというもの）や、人食いの木と重なったイエスのイメージなど）を分析し、ユングが幼少時からすでにきわめてアンビヴァレントな関係をキリスト教に対して有していたことを明らかにした。

第四章では、当時の代表的なプロテスタント神学者Ａ．リッチュルにたいする若きユングの批判が取り上げられる。当時の倫理主義的なプロテスタンティズムへの批判であり、神話の現代的有効性を強調するユングの神話的かつ神秘主義的な立場がこれによって開始されたといえる。

第５章はフロイト問題である。ユングがフロイトに共鳴していた約１０年間はかれが宗教への関心を封印していた時期といわれる。だが両者の相違はやがて顕著化する。すなわち、宗教的なものの価値を積極的には認めないフロイトにたいして、ユングはキリスト教的神話をより十分に展開させようとしたのである。このことは、フロイトの還元的主義な宗教解釈にたいするユングの構成的な宗教解釈という、きわめて対照的対立的立場へと両者を導いた。

第６章ではユングのグノーシス主義がテーマ化される。マルティン・ブーバーは、ユングが心理学の域を超えた形而上学的主張をもってユダヤ教やキリスト教などと競合するにいたったとして批判したものであるが、その際、ユングがグノーシス的枠組みを用いたことは明らかである。さらに、それは、情動を神話的イメージに変換することによって人がしだいに自己を確立するというユング的個体化論へと展開するが、この個体化論はたしかにユングの心理学的かつグノーシス主義的な救済論と言いうるものであった。

最後に第７章は、ユングとキリスト教の対話と相克の最終段階である『ヨブへの答え』を扱う。ユングはキリスト教の神観念や神話をより包括的なものへと発展させるべきであるとして、具体的には、女性的な要素、さらには悪の要素すら包摂することが必要であるとする。そしてこのようなユングの主張自体が濃厚に宗教性・神学性をおびたものであることは明らかである。

以上のような内容からなる高橋氏の論文は、錬金術の問題やキリスト教以外の宗教伝統からの摂取の問題など、ユング研究にとっての重要な諸テーマを残してはいるものの、ユング思想とキリスト教との関係を解明するという所期の目的は十分に達したと言えよう。よって本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと判定する。